

キリストの聖体

2011.6.26

ヨハネ 6・51-58

「取って食べなさい。これはあなたがたのために渡される、わたしのからだである。」ミサの度ごとに、私たちはイエスのこのおことばに促されて、祭壇に近づき、司祭の手から聖体のパンを拝領しています。キリストの聖体の祭日の今日のミサにおいて、あらためて、特別な思いをもって聖体の秘跡に近づき、「これはあなたがたのために渡される、わたしのからだである。」とイエスが言われた聖体のパンを拝領したいと思います。日曜日、家を出て教会に足を向けるためには、それなりの自覚的な努力が必要ですが、慣れ親しんでしまったミサの流れの中で、聖体拝領の列に並んで、聖体をこの身にいただくことには、それほど努力も感動も感じなくなってしまうかも知れません。

あらためて、特別な思いをもって聖体の秘跡に近づくためには、教会の最も大切な典礼儀式として、二千年の時を越えて受け継がれてきたミサにおける聖体のパンに込められているイエスの思いを、私たちが正確に受け止めていなければなりません。ここに、カトリック教会の信者としての私たちの全てが掛かっているのです。私たちがミサの度ごとにこの身に受ける聖体のパンが、私たちにまで伝えられてきたカトリック教会の信仰の証言のとおり、私たちのために十字架の死に渡されたイエスのからだであるなら、私たちが信じるイエス・キリストと私たちの関係は、私たちがミサのたびに拝領する、イエスのからだである聖体によって、イエスの側から保証され、実現しているのです。私たちに求められているカトリック信者としての信仰は、私たちの努力によって、私たちの側から作り上げてゆくものではなく、イエスのからだである聖体を、イエスがそこに込められた思いの全てとともに、教会がそのミサにおいて受け止めてきたように受け入れるということに掛かっているのです。難しく聞こえたかもしれませんが、私たちの信仰の先輩たちがミサを中心して、聖体に力づけられて、信仰生活を生きてきた理由はここにあるのです。ここにカトリック教会とその信者たちの独特な信仰の形と、その信仰の力の源があるのです。

「取って食べなさい。これはあなたがたのために渡される、わたしのからだ」ミサの中に響くこのイエスのことばは、最後の晩餐におけるイエスのことばです。イエスはその晩さんの席に連なった一人ひとりに、手に取ったパンを裂き与えながら、「これはあなたがたのために渡される、わたしのからだである。」と言われたのです。イエスがあのパンに込められた意図は明らかです。「あなたがたのために渡されるわたしのからだ。」とは、十字架の死に引き渡されたイエ

スのからだです。イエスがわたしのからだと言われた聖体のパンは、私たちのために十字架につけられたイエスのからだを指し示しているのです。そのことは、晩さんの終わりに当たって、イエスがぶどう酒の杯を回し与えながら言われたことばにおいてさらに明らかになります。「皆、これを受けて飲みなさい。これはわたしの血の杯。あなたがたと多くの人のために流されて、罪のゆるしとなる新しい永遠の契約の血である。」今はいろいろな事情で司祭だけが拝領しているぶどう酒の聖体は、十字架の上で私たち全ての者ために流し尽くされたイエスのいのちの血潮を指し示しているのです。ミサに与るたびに、私たちはイエスの十字架の下に招かれ、十字架の上で私たちに与え尽くされたイエスのいのちそのものを、パンとぶどう酒の聖体の秘跡のうちに分かち与えられているのです。

私たちの教会に伝えられてきた、ミサと聖体の秘跡に込められているイエスの思いをさらに深く理解するためには、今日の福音のイエスのおことばに注意深く耳を傾けなければなりません。

「わたしは、天から降って来た生きたパンである。」とイエスは言われています。このおことばと、最後の晩餐でパンを裂き与えられた時のイエスのおことばは、イエスの思いの中で一つに繋がっているのです。何故最後の晩餐においてイエスはパンを取って、これがあなたがたのために渡されるわたしのからだであると言われたのか、その秘密を解く鍵はここに 있습니다。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。」とイエスが言われたとき、イエスの思いの中にあっただのは、旧約聖書の出エジプト記に語られているマンナのことです。神の大いなる救いのみわざによってエジプトから救い出された旧約の神の民は、約束の地を目指す四十年の荒れ野の旅の間、日毎に神が与えてくださったマンナを食べていのちをつなぐことができたのです。「わたしは、天から降って来た生きたパンである。」というおことばは、イエスご自身が、私たちに導こうとされている新たな約束の地への旅路のマンナとなってくださることを意味しているのです。それゆえに、イエスは最後の晩餐の席でパンを取って、「これはあなたがたのために渡されるわたしのからだである。」と言われたのです。私たちの信仰の先輩たちは、このイエスのおことばに従って、聖体のパンをいただくことによって、永遠の約束の地を目指す、カトリック信者としての信仰の道を歩み通して来たのです。その人々の人生の旅路の終わりの最後の望みはご聖体をいただいて、それに力づけられてこの世からの旅立ちに備えることであつたのです。

もう少し、今日の福音のおことばに耳を傾けましょう。「わたしは天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」

とイエスは言われます。十字架の死と復活を通してイエスが私たちに導こうとしておられる、新しい約束の地は、神のもとにある永遠のいのちの世界です。そこを目指して信仰の旅路を歩む私たちに、イエスは聖体のパンとなって、ご自分のいのちを分け与えようとしておられるのです。イエスのおことばはさらに続きます。「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」マンナのことまでは理解できた人々も、このイエスのおことばは理解できず、イエスにつまずいたと今日の福音は語っています。けれども、このおことばが最後の晩餐のときに語られていれば、ユダヤの人々は、イエスが何を言おうとされているか理解できたにちがいません。最後の晩餐はユダヤの人々の過ぎ越しの祭りに重なっています。過ぎ越しの祭りは、ユダヤの人々の間に受け継がれて来た旧約の出エジプトの出来事を記念し祝う祭りです。その祭りのハイライトは、家ごとに親しい者たちが集って、出エジプトの聖書の朗読に耳を傾け、そこに語られている通りに、丸焼きにした子羊の肉を分かち合って、たねなしパンに苦菜を添えて食べる食事です。「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」とイエスが言われた時、イエスのご自分がその過ぎ越しの子羊であると言おうとされたのです。イエスの十字架こそが、新しい出エジプト、すなわち、新しい過ぎ越しの子羊となられたイエス・キリストの十字架の死によって私たちにもたらされた、旧約の神の民の歴史とその記念の祭りである過ぎ越しの祭りを超えた、神の大いなる救いのみわざの新しい始まりなのです。

今日の福音には聖体の秘跡に込められたイエスの思いと、そのイエスの思いを受け止めてきた教会の聖体の秘跡についての理解の深まりがまだまだ多く語られています。その全てを今語ることはできませんが、私たちが信じる救い主イエス・キリストがその十字架の死によって私たち与えてくださった永遠のいのちをこの身にいただく喜びに満たされて、心あらためて聖体の秘跡に近づきたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高